

(73)

氏名(生年月日)	ヤ 屋	シロ 代	クラ 庫	ト 人
本 籍				
学位の種類	医学博士			
学位授与の番号	乙第1072号			
学位授与の日付	平成2年2月16日			
学位授与の要件	学位規則第5条第2項該当(博士の学位論文提出者)			
学位論文題目	Follow-up after polypectomy of colorectal adenomas—The importance of total colonoscopy— (大腸腺腫のポリペクトミー後の経過観察—全大腸内視鏡検査の重要性について—)			
論文審査委員	(主査)教授 小幡 裕 (副査)教授 浜野 恭一, 澤口 彰子			

論 文 内 容 の 要 旨

目的

大腸腺腫は大腸早期癌の高危険群とみなされている。腺腫に発生する早期癌はその深達度により粘膜内癌(m癌)、粘膜下層浸潤癌(sm癌)に分類され、ポリペクトミー標本の病理組織学的検査で診断がなされている。m癌はリンパ節転移の危険がないためポリペクトミーで根治したと判定される。従って臨床的には腺腫とm癌とで取扱いに差違はなく、腺腫、m癌に対してポリペクトミーによる治療が広く行われている。しかし、腺腫症例(m癌を含む)ではポリペクトミー後も高率に再発をきたすため経過観察が重要である。それにもかかわらずその検査法や検査の間隔には一定の見解はない。本研究ではどのような経過観察法が最良のものかについて詳細に解析した。

対象および方法

1) 1974年から1985年までに全大腸内視鏡検査(トータルコロノスコーピー)および大腸腺腫のポリペクトミー施行後、1年以上の間隔をあけてトータルコロノスコーピーによる経過観察が施行された100名を対象とし、検査間隔別(1年群, 2年群, 3年以上群)の再発腺腫の発見率, および再発が確認された腺腫および早期癌の局在, また, m癌がポリペクトミー後の腺腫の再発の危険因子としてどれほど関与しているかについて検討した。

2) 1980年から1984年に腺腫あるいは早期癌がポリ

ペクトミーにより切除されたが、その後当院で経過観察を受けていない112名の患者にアンケートを郵送し、その実態を調査した。

結果

1) 検査間隔2年群では1年群に比較し有意に($p < 0.01$)再発腺腫が多く発見された。経過観察において29症例(29%)に再発腺腫44病変, 早期癌5病変(m癌を直腸に2, 横行結腸に1, 上行結腸に1病変, sm癌を横行結腸に1病変)を認めた。進行癌は認められなかった。再発腺腫は部位別には横行結腸に有意に多く認められた($p < 0.05$)。なお, 初回ポリペクトミー時, m癌の場合に腺腫の再発率が有意に高いことが認められた($p < 0.05$)。

2) アンケート調査(返信率63%)の結果, 40%の患者が他医においても経過観察を受けておらず, その理由は医師から説明がなかったが30%, 検査の苦痛が27%であった。

考察

従来, 諸家の報告ではポリペクトミー後検査間隔は2年から4年毎, 検査方法は注腸造影検査とS状結腸内視鏡検査との組合せが多い。本研究では再発腺腫の発見率が高いことから2年毎の検査施行が妥当で, 方法としてはトータルコロノスコーピーを行い, 特に脾彎曲部より口側の大腸を入念に観察することが重要と考えられた。経過観察をトータルコロノスコーピーで行う

利点は全大腸の微小病変が注腸造影検査に比し、より見出しやすいことと、再発腺腫に対し発見時直ちにポリペクトミーを施行し得ることである。しかし、アンケート調査より経過観察をより充実にして行うには、腺腫患者への経過観察の重要性の理解を深めることとともに、より苦痛のないトータルコロノスコーピーへの努力が必要であると思われた。

結論

大腸腺腫ポリペクトミー後にはトータルコロノスコーピーによる計画的な経過観察が大切である。なお、大腸早期癌発見の目的とした経過観察をより充実して行うためには、腺腫患者に対しその意義の理解を深めることが重要である。

論文審査の要旨

大腸腺腫を内視鏡的に発見し摘出することは、大腸癌の予防対策として重要である。本論文は大腸腺腫を効率良く発見するために、全大腸内視鏡検査による計画的な経過観察法の指針を示したものである。学術上価値ある論文と認める。

主論文公表誌

Follow-up after polypectomy of colorectal adenomas—The importance of total colonoscopy—(大腸腺腫のポリペクトミー後の経過観察—全大腸内視鏡検査の重要性について—)
Surgical Endoscopy Vol. 3 No. 2
87-91頁 (1989年2月発行)

副論文公表誌

- 1) Polypectomy of a large juvenile polyp in the ascending colon (ポリペクトミーされた上行結腸の巨大若年性ポリープの1例)
Endoscopy 16 (2) : 79-80, 1984
- 2) Localized colitis cystica profunda of the sigmoid colon (S状結腸にみられた限局性colitis cystica profunda)
Endoscopy 17 (5) : 189-199, 1985

- 3) Esophageal lesions in intestinal Behçet's disease (腸管ベーチェット病における食道病変)
Endoscopy 18 (2) : 57-60, 1986
- 4) 大腸若年性ポリープの発生要因に関する臨床病理学的検討—小児型, 非小児型における発生要因のちがひ—
日本消化器内視鏡学会誌 28 (11) : 2541-2550, 1986
- 5) Crohn病と肛門部病変
胃と腸 22 (3) : 261-269, 1987
- 6) Crohn's disease in the esophagus—report a case (クローン病の食道病変の1例)
Endoscopy 20 (3) : 118-121, 1988
- 7) 急性GVHDの腸病変の1例
胃と腸 24 (10) : 1137-1143, 1989